

## 文

## 化

だ能楽師の家が持つ京都市上京区の能舞台で最近300回近く開講する。今年で20年。来場者はのべ40万人に届くとしている。

## 能楽部観世会に入会

福岡市の出身で高校まで暮らし、同志社大学に進学して京都にやって来た。小さい頃からピアノを習っていたが、10代になって父親から「何か日本のものもやれ」と言われ、両親が習っていた

「この袋には何が入っていると思う?」

「お面!」

「これは能面。面と呼びます。では般若(はんにや)は男ですか、女ですか?」

「男!」

「正解は女。目には悲しみがあふれてる。男の子たちは女性を泣かせないでね」

矢継ぎ早に修学旅行生に語りかける。約1時間で能楽の魅力を紹介する体験型の「能楽おもしろ講座」の1コマだ。嫁い

## 能の世界へおいでやす

◇テンポ良く1時間で歴史や魅力伝える 40万人の来場者◇

河村 純子



修学旅行生を舞台上上げて能面の説明をする筆者

ラシを郵送。乳飲み子を抱えながら宛名を書き、集客に奔走した。その経験が今に生きている。

「能楽おもしろ講座」を思い立ったのは、息子が小学生になり舞台に出るようになった頃だ。楽

て入ってきたのが、夫となる観世流能楽師の河村信重だ。私は卒業後いったん福岡に戻って証券会社で働いた後、25歳で信重と結婚。京都で能楽師の妻として暮らすことになった。家には1956

年に建てた能舞台がある。他家と比べて新興の河村家が会を開くため、夫の祖父(父伯父)たちが尽力して建てたものだ。結婚するとすぐ、義父が始めたばかりだった「女性のための能を知る会」の事務を任された。平日の昼、女性向けに開く会で、毎回8千枚のチ

ストーリーを進めるといふ話がある。テンポよく能楽の面白さを伝えることで「もっと知りたい。見たい」と思わせるような講座をやろうと考えた。

## 飽きさせぬ構成

約1時間で歴史や舞台構造の紹介、面や装束、謡や囃子の体験、ミニ公演など、各5分程度でどんどん新しいコーナーに移る構成にした。ただ、工夫した内容を用意したもの、肝心の集客には苦

労した。京都には年間約100万人の修学旅行生が来ると思えるが、彼らと呼ばれて旅行会社に頼んでも「実績が無い」と断られた。初年の97年に開いた講座はわずか3件だけだった。

しかし次第に口コミで評判が広がり、5年目には52件に。2004年には夫を病気で亡くしたが、能楽を広めるために講座に奮闘した。10年目には131件まで増やすことができた。

ンセルが相次いだ。このときは金閣寺の駐車場に通い、バスをチェック。学校名をメモして手紙を出した。長期作戦をならんだ営業だ。次第に開講数は回復した。

参加者は企業研修や一般のグループにも広がっている。多いと1日6回の講座を開く日が続く。体験用に使う観客の白足袋を何百足も洗濯するのは重労働だ。能楽師を各都道府県に呼び、大阪や名古屋からも来てもらったことがある。

英語で台本作り講演 初めて外国人の団体が来たときは、通訳をして

いる友人に通常の講座を何度も見てもいい、英語の台本をつくって覚えて。外国ではやっている日本の漫画の話を入れるなど、興味を引いてもらう工夫している。

「能楽師の集中力を見習って努力したい」一あれから部活の道具も大切に扱うようになった。講座を受けた中高生たちからも「感想文は、何よりの励みだ。講座を機に文化祭で実演した学校もある」。

能楽の普及に少しでも役立つために、真剣勝負の講座づくりをこれからも続けたい。(かわむら・じゅんこ「能楽おもしろ講座主宰」)